

教えてください」「話さないで黙りますよ。番号、  
「伊泽さん、事故の後、奥さんと話したんですか」

「いや」「電話をじたんですか」

「伊澤直長さんは、当直長の伊澤郁夫(52)だったとき作業管理グループの大野光幸(51)は、当直長の伊澤郁夫(52)でしたいた。

代制となり、次の交代に向けて待機していたのだ。

日々から主任以上の運転員による交換を行なっており、中央御室での原子炉監視は3軒の建屋の爆発や放射線量の上昇のため、中央御室で伊澤はその運転員たちがいた。

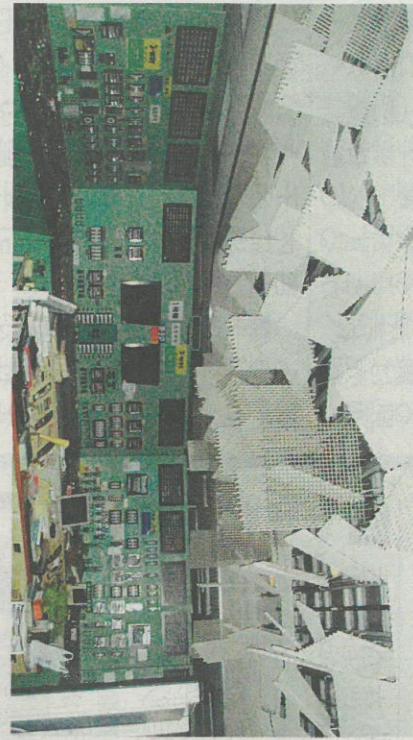
3月15日朝、福島第一原発免震重要棟2階の会議室には各号機の運

転員たちがいた。

■ 第5章「命」

証言 福島第一原発  
全電源喪失の記憶

## 覚悟の残留



伊澤直長らがどまつた、「1号機の爆発で天井のパジット放射性物質を含んで高線量になつた。雨が降つていて。雨は大気中にあつて林崎と同じ班になつた。」  
伊澤は事故免震棟を出ると、廊下に出て1階の出入り口付近で、誘導に当たつた。

免震棟からの退避が始まり、大野も出でてじたみつた。伊澤の姿を見つけた。伊澤は事故免震棟を出ると、廊下に出て1階の出入り口付近で、誘導に当たつた。

林崎は退避する社員でぎり返す念を押したが、伊澤の返事はなかつた。

だつたが、伊澤は涙声になつて階に向かつた。

…。会話はほんのわずかな時間による退避順を聞いていた後、免震棟「分かった」

「うん、元氣だ…。うん…。(24)は緊急時対策本部で総務班長に「絶対、外で会いましょうね」

大野はPHSを伊澤に手渡した。

3、4号機の補機操作員林崎悟答えた。

「つながらましたよ!」

「つかつた」。伊澤はそう一言、だが、伊澤の願を見るよと一緒に絡を取るところできなかつた。

必ず、また、くつからね」

店を経由する方達で伊澤の妻に電話

「伊澤さん、必ず戻つてくつから。」「俺は、残る。君は出なさい」

大野は伊澤の手を握つて言つた。い表情で答えた。

大野は伊澤から電話番号を聞き出る目だった。

伊澤がそつ尋ねると、伊澤は隣し

とが何を意味するのかも分つていて「伊澤さんは出ないんですか?」

伊澤の質問を物語つていていた。残ることでいた。

残るつもりなのだと確信した。が、伊澤は東電の青い作業服を着

その頃を見た瞬間、大野は伊澤がい防護服姿だったが、大声で誘導し

退避する社員たちのはじめは白

伊澤が立っていた。

伊澤が立つた瞬間、大野は伊澤が

残るつもりなのだと確信した。が、伊澤は東電の青い作業服を着

その頃を見た瞬間、大野は伊澤がい防護服姿だったが、大声で誘導し

退避する社員たちのはじめは白

伊澤が立つた瞬間、大野は伊澤が</